

船する仲間を眺めながらの作業もあった。いつ順番になるのかと待てど秋過ぎ、ついに今年最後の引揚船と聞かされ、また厳冬の冬を過ごさなければならず、どうにもなれという気持ちになる。運動も総仕上げと作業ノルマ二〇〇%達成にエスカレート。体力的にも限界、歯を食いしばっての毎日だった。

翌二十四年九月、ついに乗船することができ、ソ連海軍の誘導で港を出るとき本当に日本の港に着くのかと疑った。台風で荒天の日本海、航行中ソ連で日本人リーダーだった連中に対する反発の空気が高まり、言い争い喧嘩が起き、海に投げ込んでやるといふ人たちもいた。海岸線に松の緑と草ぶき屋根を見たとき確かに日本だと胸が踊る。筋金入りの闘士としての敵前上陸の合い言葉も平穏な舞鶴入港となり、足かけ五年まる四年にわたる抑留生活から解放され、七年ぶりの祖国の土を踏むことができた。

多くの出迎えを受け故郷に帰る。しかし私の人生の中でこの七年間は何であったか。社会的、経済的な立ち遅れは大きかった。敗戦、悲惨な抑留生活の体験と帰国を

夢見て祖国の土を踏めなかった多くの戦友のためにも、再び戦争を繰り返すことのないよう、後世に伝える責任がある。残された人生を恒久平和のために微力を尽くすべく努力しなければと痛感し、先祖伝来の農業に精根を傾ける日々である。

南千島択捉島守備そして

ソ連強制抑留生活

鳥取県 井澤 正義

終戦のちょうど一年前、昭和十九年八月十四日、豊橋第一陸軍予備士官学校を卒業し、北部軍に転属命令を受け、同日夜行列車で北海道に向け出発した。北部軍司令部にて、択捉島に駐屯する独立混成第三旅団独立歩兵第四一九大隊に転属の命を受け、直ちに根室に直行し、輸送命令を待つ。

北方四島の中で、一番広大な択捉島に一か月間駐屯した経験から、この島の当時の軍の配備等について若干紹

介し、皆様の参考に供したい。

当時からすでに四十五年が経過しているため、詳細については忘失している事項も多いので、一部、当時の大隊長であった三原録郎氏（福岡県）のご援助を得て、紹介する。

一 独立歩兵第四一九大隊行動概要

(1) 編成

① 本隊は昭和十九年七月、京都歩兵第九連隊において編成し、七月十七日京都出発、同二十一日北海道網走に集結、北部軍司令部の隷下にはいる。

② 大隊の一部はすでに択捉島に進駐していたので、八月十七日より八月二十五日までの間、根室において待機し、乗船命令を待つ。

(2) 択捉島進駐のため海上輸送

① 大隊は船舶輸送部隊の輸送計画に基づき、第一次・第二次の二群に分かれて乗船した。各輸送船は収容人員一〇二小隊程度の小船群で、濃霧の荒海輸送は困難を極めた。

② 第一次輸送は本部、第一中隊、歩兵砲中隊、野砲

中隊の重火器を主力とし、八月十二日網走港出帆、同十五日択捉島天寧泊地に上陸。

③ 八月二十六日、根室で待機中のところ、乗船命令を受け、同日根室港を小型漁船にて出帆し、途中、色丹島で一泊し、八月二十九日択捉島天寧泊地に上陸。この間、四〇五米の大波にゆられ、船は木の葉のようで、船上では、酔いのため食事もできず、苦しい三日間であった。八月三十一日思うが、配属された第四中隊が上陸して来たので、初めて合流した。

(3) 択捉島守備

① 大隊は旅団命令により択捉島の中央部単冠湾に面した重要な一地区の守備担当となった。

② 敵の侵攻にあたっては水際において撃滅を期するため、天険の地形を利用して、天寧台とラッコ島を両翼拠点としてその中間に主力を配備した。荒天の冬期を目前にして、日夜陣地構築に全力を傾注した。一方、旅団命令により、ラッコ島、留別間の機動縦断道路建設に第四中隊が当たり、その

作業隊長に私が任命され、約二か月間日夜道路作業に専念した。なお、留別からの作業隊長に独歩二九五大隊の同期の天農少尉が当たり、ちょうど中間地点で、上陸以来初めて再会し、固い握手をしたのを覚えている。

③この間、南方戦線の戦況は急を告げ、十九年七月サイパン島、八月グアム島、九月モロタイ島等米軍機動隊の海空よりの熾烈なる物量攻撃に抗し切れず、次々と玉砕するに至った。

④米軍の上陸戦法は、海空よりの砲爆撃により水陸陣地を潰滅し上陸、橋頭堡を築き逐次占領地域を拡大する戦法であった。

⑤前記のごとき米軍の戦法にかんがみ、敵を水陸に撃滅するの策は利あらずと、師団としては、縦深配備により長期耐久戦法に転換する方針を決めた。

このため、大隊は旅団命令により、天寧台、ラッコ島の拠点はそのままとし、主力は奥地約四キロにわたる縦深の配備変更を決し、二十年一月

より急拠陣地移動作業に着手。

⑥前記のとおり水陸決戦を避け、島内一面の這松と天険の地形、濃霧等奇襲作戦に有利なる条件を最大限に活用して敵を攪乱、長期耐久戦の策を講ずることとなった。

⑦ちょうどこのころ、師団命令で、遊撃隊を編成することとなり、私が隊長の命を受けた。島内各部隊から若年下士官約五十人を招集し、ラッコ島付近で約一か月にわたりこの訓練を開始した。訓練終了と同時に、この遊撃隊の行動拠点として隠密洞窟陣地を島内随所に構築した。

⑧大隊は陣地構築と平行して弾薬資材、糧秣の分散等、日夜先頭準備に全力を尽くした。

⑨六月二十三日沖繩本島は米軍の手に陥り、八月に入りソ連軍の満州・樺太の侵攻を見るに至り、一層の緊迫感をもって戦闘準備強化中、八月十五日突如終戦の天命を受けた。

⑩目標を失った虚脱の中に気を取り直し、次の行動に備えて身辺環境の整理に日々を過ごした。

● 択捉島の占領が米ソいずれか不明にて、不安な毎日が続いたが、八月二十八日ソ連軍先遣隊（海軍少佐指揮一個中隊）が留別湾に上陸し、ソ連軍の占領が決定的となった。

次いで、九月十日ころソ連軍本隊の進駐により本格的交渉にはいり、各隊の武装解除と将校を一地に集結することとなった。このため、我々将校は天寧飛行場の一角の宿舎に集合した。

● 我が大隊は、第二九五大隊（小出部隊）とともに、ソ連汽船（五千トン級）で、ダモイ東京（東京帰還）という甘言にだまされ、九月十九日暗夜の単冠湾を出港し、島をあとにした。

二 終戦後のソ連（シベリア）強制抑留生活

(1) 昭和二十年九月十九日夜半、単冠湾を出港し、二十一日朝、樺太大泊湾に寄港し、夕刻同港を出港、二十三日朝ソ連沿海州ワニナ港に上陸。貨物列車（一車両約四十人）で、二十四日朝ムリイ地区収容所三一分所（ワニナ港より約五十キロ）に到着。この間食糧の配給もなく一日に手持ちの乾パン一袋を三

人で分け合った。シベリアの収容所はソ連がシベリア開発のため、当時の囚人をこれに充て、ヨーロッパ地区から多数の囚人が重労働に服していた。この囚人収容所の跡である。

(2) 収容所は、鉄道の駅もない森林地帯を切り開いて建設したバラックで、その周辺にソ連兵と関係者の住宅が点在していた。収容所は高さ約三メートルの木柵（外側に有刺鉄線）をもって囲み、その四隅に木柵より高い監視歩哨の望楼があり、収容所正面には衛兵所があり、内部建物は起居用バラック、炊事場、医務室、入浴場、便所等は二心整ってはいるものの、設備ははなはだ貧弱のものである。

(3) 昭和二十年

作業は一部の人員で機関車用まきづくりのための伐採と、主として鉄道路線の補強作業であった。十月下旬ともなると、気温も氷点下四十〜五十度となり、択捉島では各自五枚程度の毛布があったが、ソ連船に乗るとき厳密な検査で、防寒用として毛布一枚と外とう一着しか許されず、寒さは日増しに厳し

く採暖用のまき収集、バラックの補修等行ったが、初めてのシベリア越冬は不安であった。

十一月酷寒期にはいり給食は黒パン三百グラムが主食で、作業は厳しく特に鉄道線路補強の砂利列車到着時は短時間に荷おろしせねばならず、深夜であろうと吹雪の天候であろうと容赦なく作業を強要させられ、一層体力を消耗した。

(4) 昭和二十一年

① 抑留後は日本国内の事情はもちろんのこと、シベリアに抑留された他部隊の情況も全く不明で、将来何年このような生活が続くかと不安の中で、昭和二十年の抑留四か月は暮れて昭和二十一年の正月を迎えた。

② 一月にはいると、外気温も一段と低下し、零下二十度以下の日が続く一方、給与環境の悪条件のもとで酷寒の作業は続いた。このころはまだ択捉島出発時の編成のまま、心のつながりが保たれ、お互い助け合って生きていれば必ず日本に帰れると固く心に近い合って苦しみに耐えていた。

③ 大隊の中でも、年齢は私が一番若く当時二十四歳であった。隊員は召集兵が多く、三十代が大半で、四十代の人も若干いた。このため二月、三月にはいると栄養失調・急性肺炎等で発病する人が多くなった。医薬品もほとんど択捉島から携行したものであり、それも残り少なく、軍医も十分な手当でもできない状況であった。入院しても十分な手当ができないままこのシベリアの地に恨みをもんで倒れたのも、この二十一年の春が最も多く、実に悲惨な春であった。

④ 七月にはいるや、突如私一人が他の収容所に行くことになり、十九年八月以来生死をともしてきた上官、部下と決別することになった。これは、収容所で病人・死亡者が続出するので、このままでは数年で全員犠牲者になるとの考えもあり、私が指揮する作業では、しばしば怠業を行っていた。これがソ連側の意に反したために、懲罰の意味で労働させられる羽目となった。もちろん行き先は不明であった。七月三日ソ連歩哨とともに貨

車で出発した。以後シベリア鉄道にゆられて、八月十九日にヨーロッパ地区のモルタビヤ第四収容所に到着した。なんとこの間四十七日の貨車輸送であった。この間、停車駅から数人の将校が乗車して来た。話をするとみながソ連側と何らかの摩擦のあった連中であつた。総員五十数人と記憶している。

翌八月二十日から、早速三人一組となり伐採の重労働が始まつた。この中には大尉、中尉の人も多く年齢も三十代後半から四十代前半の人が過半数を占めていた。出身地も北海道、東北の人が多く、このときに多くの知人を得た。

前述のとおり毎日伐採作業のあけくいで昭和二十一年も終わった。

(5) 昭和二十二年

- ① 昭和二十二年一月になって再度他の収容所に移動することになった。移動先はマルシヤンスク第七〇六四収容所であつた。(モスクワ南西約百五十キロの地点)

この収容所に一月八日入所した。ここは我々の間では国際収容所と言つていた。収容所の中には、ドイツ、イタリア、ハンガリー等の捕虜が収容されていたので、文字どおりの国際収容所の観があつた。日本人収容者は全員将校であつたと記憶している。ここでの作業は比較的軽作業で、暖房用、炊事用のまき運搬、除雪作業を交互に行つていた。その反面、夜間ともなると、洗脳教育が始まつた。日本から来たと思われる共産党員が講師で、マルクス・レーニン主義の講義等を毎日二時間ほど聞かされた。もちろん、民主主義なるものも盛んで、反軍思想等を叫び、また一方においてはソ連の礼賛と共産主義の宣伝でにぎやかであつた。

- ② 五月四日は、収容所で強健な者三十数人がこの収容所から南方三十キロのビュンスクという森林地帯に伐採作業のため派遣された。ここは古い馬小屋を改良した建物であり、夜になると屋根の破れから星が眺められた。時期的に氣候も比較的温暖

であり、気案に毎日を過ごしていた。しかし反面「ハラショーラポター」(優秀作業者)は「スコーラダモイ」(早く日本に帰る)だと作業督励のための言葉を幾百回も聞いて、尻をたたかれた。

十月にはいると、ソ連将校から「ダモイ東京」(東京帰還)との情報を得たが、またいつもの甘言だと信用していなかった。十月二十二日急に前記マルシヤンスク収容所に集結との命令で、その日に復帰した。

③マルシヤンスク収容所に復帰すると、日本帰還とすることで、二日ほど身辺整理、ソ連側からの身上調査等があり、十月二十五日ころ帰還のための貨物列車で、ナホトカ港に向け出発した。何分臨時列車のため、臨時停車ばかりで、半日くらいも動かないときもしばしばあった。

④帰還列車に乗車したものの、入ソ以来幾回となくだまされ続けていたので、他地区への移動ではないかと、半信半疑の毎日であった。十一月にはいり、シベリアに近くなるので、気温も零下となり

毛布にくるまって寝ているが、車内の壁は白く氷が付着していた。

十二月一日夕刻ころナホトカ港に到着した。海上を見ると、汽船が一隻はるか沖合に碇泊していた。あの船に乗船できるのだと皆の顔もほころんだ。この喜びもつかの間、この汽船は本年度最終便の船で、一時間前に出港したと聞かされた。我々の列車到着が予定より遅れたために出港したのだった。

⑤このため、ナホトカで越年することとなり、天幕生活が始まった。作業は、付近の製材工場で木材の運搬、宿舍暖房用のまきづくり、及び来年以降の日本人帰還に備えて、木造バラックの建築等であった。一方、夜になると、前述したソ連の手先の民主運動指導の洗脳教育があり、この出席回数少ないものは、反動分子として約五十人くらいが厳冬のシベリア奥地に送り帰された。

(6)昭和二十三年

①昭和二十三年の正月を迎え、海上はるか祖国をし

のび、いつの時期に帰還できるか、またシベリアに送り帰されるか不安の毎日でもあった。

②三月、四月と経過し、気候も大分よくなり望郷の念も一層強くなった。五月一日、本年度の帰還再開が発表され、我々が本年度の第一便で帰国することが決定した。五月四日、明優丸に乗船、五月六日懐かしの日本、「舞鶴港」に上陸帰還した。

シベリア三年二か月

北海道 倉部 房次郎

抑留への予感

あの年の六月ころ、ある人に「ソ連は参戦する。関東軍は敗れてシベリア行き、ロシア語を覚えておいた方が身のため」と言われたことが、妙に心に引っかかっていた。そのせいから「トウキョウダモイ」のソ連兵の言葉も半信半疑、私のはそれとは違う運命が待ち構えているよな思いがしてならず、シベリアに向けて歩む足どりも

重かった。予感はおしくも的中、シベリア行程はダモイではなく、長く暗い抑留生活への序幕であった。

空腹での重労働

抑留中ラーゲルは七、八か所も変わった。だれもが経験したように、いつも空腹を抱え、ノルマに追い立てられ、重労働に明け暮れた。

作業は草刈り、伐採、製材、れんがづくり、建築、土木、雑役と何んでもやらされた、「ノルマ」身ぶるいする言葉だ。食事はあまりにも少量、とても重労働に耐えられるものではない。野草も食べた。ネズミを食った連中もいるはず。馬糞が饅頭に見えたりもする。食事した夢が覚めてみたら毛布の端をかんでいて苦笑い。

食料を扱う使役は皆に歓迎された。多少でもくすねる事ができたからである。

穀物倉庫の作業で米をくすね、袋を下着に隠し持ちかえったところ、ラーゲル入り口の検査で発見され、目くらむほど殴られたこともあった。夜中に監視兵のすきを見て、二、三人で囲い線をくぐってラーゲルを脱出、畑作物を失敬するという危険な行為も体験した。